

口腔内で調整の少ないクラウンへの挑戦

～ 順次誘導咬合を用いて ～

東京都技工士会
榊原デンタルラボ
榊原功二

補綴装置の製作を行うとき咀嚼器官の役割とは何か、生体に調和した補綴物とは何かを考えて、さらに下顎運動に調和した補綴装置の咬合面及び上顎前歯舌面形態を考えることが重要となります。その基礎となる順次誘導咬合は1987年にウィーン大学のスラビチェック教授が提唱したもので、この理論はヒトの乳歯の萌出から永久歯列完成にいたる成長発育過程を、顎頭蓋の発達とリンクさせた生理的咬合理論であり、咬合構築のための上下顎関係はアングルⅠ級咬合の獲得を目指します、これは上下顎大臼歯における1歯対2歯の関係であり、この咬頭勘合位の維持安定のための咬合の **Key** となる大臼歯のオクルーザル・コンタクトポイントの確立について考察したいと思います。また咬合様式としての犬歯誘導咬合とは、強いクレンチングの時臼歯が前歯を保護し、また強いグライディングを行ったとき前歯が臼歯を保護するという咬合の基礎であるミューチュアリープロテクション（相互保護）を構築するということであり、歯科技工士は天然歯の咬合面展開角の後方歯から前方歯へと急峻となっている、歯の順次性を出来るだけ再現するということが重要となります。

今回はこれらの、咬合の概念を小補綴装置制作にどのように取り入れればよいのか、また生態に調和した補綴装置とはどの様に考えれば良いのかなど、現代において考えるべき咬合の問題点を皆様と考えてみたいと思います。